

懸香

泉鏡花作

一

翌日の、あの、物凄い、大風大雨につけても、其
の夜の光景が想はれる。

と間宮は話した

陰鬱な夜で

あつた。

胡瓜の蔓が立枯れた、茄子の核が焼ける、田畑も
干破れる早が續いて、それが油早と云ふのに變ると、
眞赤な空に汗の滲む粘々とした雲が湧いて、南を蔽
ひ北を塞ぐ。東にも西にも、ソヨとの風もない。時々
人じらしな湯氣の小雨が煙のやうにむら／＼と掛る
かと思ふと、赫と破れるばかり照りつけて、砂を煎
り、石を煮る。

湧立つばかり、ぐら／＼と海の波が悶えて動いて、
喘ぎ／＼、白泡の二を吐く、こんな時を土用波と云
ふのである。

五日も六日も續いた。

其の日は午後から暮方に、雨の量が心持多かつたゞ
けに、濕氣は猶さら、蒸暑さと云いたらない。

瓜に毒あり、草いきれ、月見草の花の大な露も、
熱い雫して悄れて居よう。

「遣切れねえや。」

「殺さば殺せ。」

床屋も暇なこと。職人一人、海岸通りの門に立つ
て、はだけた胸に燃える炎を眞赤に受けつゝ、通が
りの若いものと、ふてくされに宵闇の空を睨んで喚
く。炎は小さな百日紅の低い枝に、缺けた
土瓶を釣下げて、石油をめら／＼と燃し立てるので、
群る羽蟻を焼くのであるが、彼等の引捲つた脛のあ
たりに、黒く胡麻を盛つて堆い。

今夜は蟲が夥しい。もう／＼と立つ油煙の裏に、
羽蟲を踏んだ其の職人の脛の毛も、一ツ一ツ燃ゆる
火に蠢いて、眞赤な蟻の這ふやうな、其も暑し。

「殺さば殺せか。」

間宮は通掛りに苦笑。近頃は都も町も、村里まで、大方は電燈に成つて、時々洋燈を思出すのも、一つは其香氣の可懐いほどな、嫌でない石油の煙に、さて口鼻を呼吸苦しい思で過ぎた。

其から海へ出る一町ばかり、兩側の松原は、犀川の名産孫太郎の蟲屋が休めば、金魚や金魚も憩ふ、車力も憩へば馬も休み、西洋の婦人も涼傘でゐむ。日盛にも翠の露の、青い松葉を滴るのが、恰も古綿の、それさへ厚衾で、天窓から褥氣を被せた。

彼は浴衣の短い裾もへばりつく、汗の足を曳摺つて、海岸の小橋を渡ると、汐入の流は溝の水、蘆の葉のいきれる香に、橋枚は乾いた湯殿を踏む。

やがて常夏、月見草、露草の花所で、此の新宿の草の中には、松蟲が集く、と云ふが、なか／＼、それ處の沙汰ではない。

乾いた咽喉は、海の音に嚙付いて、海岸へ出たの

である。

唯、一層陰惨たるものであつた。

風の死すると云ふ夕風ゆふなぎの潮しほは、夜に入つて一層重そうおも苦し、し恰あたかも銅あかぎねを溶とかして一面めんの渚なぎさに塗ぬり附けたとよりは思おもはれぬ。

打うつて擴ひろがるのは海うみの裂さけるのである、寄よせては返かへすのは、浪なみの沸わ立つのである。鳴なるとも響ひびくともなく、どう／＼と黒くろく敵うねつて、敵うねつて時々とき／＼大敵おほうねりを投なげる、とゞもに、紫むらさきに藍あゐの進ほとほしる稻妻いなづまを倒たふしたやうな、青あゐい光ひかりが渚なぎさがまいて、油あぶらに注そぐかとニぱつと燃もえる。

海うみは宛然さながら、ニ轉のたれ悶もだえるゆる火山くわさんである。

海水浴更衣場と札打つた、濱口の葭簀圍も、恚る
 折から祭の夜更けた寂しい見世もの、八幡の藪で、
 五燭ばかりの電燈が蜘蛛の巣を捌くが如く、もじや
 ノと白砂を這ひつゝ照らす、こゝに人間の力で得
 た光明は、單に此ばかりであるのに、其さへ暗闇の
 威勢に押伏せられて、却つて我人を裏切つて、明の
 中にイむものを、外へ突出す、底意地の悪い影らし
 い。

が、あかり先だけは、渚の浪が尋常に砕けて白い。
 無論、一掬の涼味もある事か。早雲が崩れて疊まつ
 て、明日まで蟠つてまた照つけようとするやうに、
 むら／＼と群り累る、其の中に黒い斑のぶよ／＼と
 動くのは、時を得顔に海月が躍るのであらう。

「何うだ、人間、状を見たか。」
 で、やつちや、こらさ、と寓燈で燥ぐ。

冥々として黒い海は、中空に築上げた大なる山に

似て、脚を立て煽を揚げ、遮るものは岩も草も砂も、
微塵に粉にしようとして、紫の牙を嚙む、
浪は毒龍の敵りである。渚の飛沫は幾億の魚の、
嘗て人類に虐げられた浮びも遣らぬ怨靈の炎である。

さて、不気味さは、ものに譬へやうを覺えない。
海原の此の光景を極端な優しいものに較いべよう。
—— 恰も暗の夜の紫陽花の花の周圍を、螢が燃
えつゝ幽に繞るに髣髴として居るのである。

あれ、晃々と沖が光る。砂白く風清き、月ならま
しかば、水晶の兎が伴つて走るとも見む、潮に激し
て逆に立つ波、黒坊主か、大鮓か、海の魔物か、平
家蟹か、燐火をどしの鎧を揃へて、
「あら珍らしや如何に義經。」

陸と水との戦に、いま其のいづれか勝敗の決する
のは、雲を走る稻妻の表裏反覆、心一つでなければ
成らぬ。

其の恐しい光さへ、山の端かけて、沖かけて、大

空の底に針の尖ほども顯れず、雲蒸し、風消え、砂も密語を塞いで居る。

天は滅びたのかと思ふと然うでない。風は死んだのかと思ふと非ず。時々ゑみ破れたやうに粒々と星が覗く、が、赤く黄色に淀んで、あせもが爛れたやうに見える。見えるかとすれば早や暗い。風も忘れたやうに北から吹く、が、海豚が呼吸を吐くやうに、腥くむつと来る、来るかとすれば、そよりともせぬ。

浪は此處を切れ、彼處を打とてこそ騒げ。射掛ける矢にも、弩にも似て、真中で白く消え、前後に黒く折れ、颯と折れては、直ちに射、どろ／＼と消えては忽ち撃つ。

が、渚に碎ければこそよ。音もなく伸したらば、我が大陸は一舐めに舌の尖で舐られよう。岩に角のあるも、峰に巒積のあるも、砂に數あるも、骨身を碎いて潮を防ぐ努力かとも疑はるゝ。

可恐は暗夜の蒼海である。計り難きは其の海の心

である。凄^{すこ}いのは紫陽花^{あぢさゐ}の花^{はな}の周^ま圍^{はり}を螢^{ほたる}が飛^とぶやうな景色^{けしき}である。

尤^{もつと}も恁^{かう}までのことは、此^この濱^{はま}に滅^め多^{つた}にない。

が、其^その年^{とし}、土用波^{どようなみ}の間^{あひだ}は、四^か日^か五^か日^か恁^{かう}うした趣^{おもむき}が毎日^{まいにち}毎^{まい}夜^よ

つい、其^その三^{にち}四^{まへ}日^へ前^への夜^よの事^{こと}と聞^きいた。」「

「あの浪打際をね、旦那の前だが。」

百姓兼帯の植木屋で、石も叩けば釘も叩く、治平と云ふ親爺が、縁側へ廻つて煙草話。

「鶉の三郎といふね、ひやあ、三浦の大助第の郎黨と聞えべいが、在方の役雑ですが、小博奕の一つも打つて、しわりごわりと鼻唄で、戸塚通ひをしようと云ふ野郎だがね。渾名の附いた夜網打で、磯端にかじめはねえでも、野郎の影の浪際に、鶉と押立つて居ねえ事はねえだ。」

博奕を打つて、鼻唄で、網打てえば、でつぶり肥つた逞しい漢に聞えいべいが、可笑しな事は、此が又然うでねえ。青瓢箪のひよろりとした、瘦つぽちで脊の高え皺びた野郎、小學校の教員様が後家に戀煩ひをしたと云ふ容體だでね。お前様の前だが、へツへツへツ。眞個は鶉の脚だね、――形がよ。

右の鶉三郎がお前様、昨日 今日は一昨

日だね。其の晩に限つて鶺鴒の鳥の行水だ。はて何故
と言はつせえ。濕氣續の土用波だで膝切打掛けるも
んだで、ばしやり／＼一本脛の繩飛をする形で、暗
闇の磯を狙ふだあね。腰のびく、にや小黒網の腹びか
／＼する奴さ四五疋ぶら提げて、眞黒な網を尻尾の
やうに押立てゝね、旦那の前だが。

然うすると、ひやい、目の前一間ばかりの近い處
に、何か、ひやい、大え魚の腹かと思ふものが柔か
う横に成つて、ふは／＼と慙う、浮いつ沈みつする
だ。

や、浪がしらへ打上げたかと思ふと、右の胴體さ、
もろに引銜へツけえ、ふる／＼と震ふ手足が見える。
わつと見ると、どつと碎けて、眞蒼に成つて潮の擴
がる中へ吐出されたやうに成つて、七顛八倒轉がる
だ。そりや、背中だ腹だと思ふ間とつてねえ。じゃ
／＼ツと引いて波の底へ舐込んで、も一つ引銜へよ
うとする處を、鶴三郎は網も何も押放出して、引
て行く波に獅嚙着いて、其の白いものを捺離したわ、
抱取つたわで、じゃば／＼と遁上つて、吻と成つて

砂濱へ諸膝を支くと、其の身投げだか、搦だか、骸
ごと打倒れたと思はつせえ。

鼻の尖に、ふつくり、むつちりとした、ひやい、
玉さ洗つたやうな何とも云へねえ乳だ、肩胸のすん
なりと脛の伸びた婦人だね。潮を拂うて美しい。

は分つたけれど、怪我にも身投にも、お
前様、旦那の前だが、切端一ツ掛けて居ねえ、爪の
尖まで、雪のやうに透通るてえ法はねえ。

魔性だ事は、初手邊から明白だでねえか。

其を、はい。鷗の野郎、竹法螺を吹いて呼ばるま
でもねえ。大え聲で喚いたら、濱に人ツ子は居ねえ
までも、異人館もあるこんだ。コツクや馬丁も駈け
て來べいものを、何故だかね、ひやい、右の戀煩ひ
の髪蓬々てえ顔色で、慌てた目玉ばかりきよるつか
いて、見たか、聞いたか猿真似よ。倒に擔いで水を
吐かせる處を、はい、病院の醫師様もどきで、ふつ
くら胸中へ腰を掛けた。親指の肚で、新粉細工を伸
す容體、折鶴の羽へ呼吸さ吹込む鹽梅さ、旦那の前

だが、へッへッへッ。

何、串戯處ではねえ。

其のうちに鵜の野郎、些と心が落着いて、暗夜と潮煙に打暗んだ眼球さ働いて、――澤山遠くでもねえ、直き其の演の口の海水小屋が薄り朦と映つとるだ、あの光で見ると、――へい。

其時、鼻の下を横撫でして、息を呑んで少し低聲で、

「其の眞白な婦人の仰向けに成つた咽喉もとから腋の下へと差して、紅絲の染んだ體に、赤い筋が細う、ベツとりと流れるだ。若い叔母も別嬢の従姉妹も持たねえ、呼吸のねえものが、鼻血を垂らすわ、と熟とへい、透いて顔を見ると、何うでえ。」

治平はボンと頸を叩いて、

「首がねえだ。」

間宮は呆れて聞いたのである。

四

親爺は禁呪の九字劃る眞似。

「何と、其の位な事に、へい、魂消ては成りましねえ。まだあるで
鵜の野郎、雲から、すつてんと落ちたほど、腹から、こつて貝殻に尻を突いたと思はつせえ。」

壓すので凹んで居た乳の下の鳩尾さ、ふくりと元へ返つたゞがね、其の首なしの婦人の死骸よ、ずる／＼と自然に摺出すと、雪が轉がるやうに、暗がり
を、白み返つて、波際を逆に濱の方へさして、すんなり／＼。

其が、はい、あるいべい事か。濱口の右の海水小屋の葭簀張の裏へ込込んだ。魔ものだね、お前様。
沖の波には海月の行燈も燃えるだに、其方へと消えもせうか、人間が點した、お刺に開化の 天邊だあ、
電燈の光る處へ悠々と納るだ。

やあ是、昔天竺の阿奢世太子は、美女の胸中を切

つて餌に刺して、鰐鮫を釣つたと云ふだ。どんな異
人が鯨を釣る、と鵜の野郎、貝殻を掴んで平伏張つ
たまんま、半分上つた眼球で見据ゑると、葎簧張の
中に口八臺てえ 恠掛りの附いた細長い椅
子があんべいね。

あれへ、漆見たいな髪を捌いた、抜けるほど色の
白い、凄いやうな美しい女が、姫路の御天守に住んだ
と云つかけえ、華奢な小坂部姫と云ふ姿で、つんとし
て腰を掛けた、緋の袴ではねえだよ。

それさ、花も雪も一所に絡はる錦繪のやうな片褸
を端折つてよ。白い足が、やがて、くるぶしの少と
上の處まで見えたと思ふ 野郎、夜の炎天
に氷を浴びて頭から震へ上つた。

他でもねえだ。何が、人里を離れた山でなし、島
でなし、奥様も、姫様も、潮湯治をさつしやる場所
だ。暗夜だとして仔細はねえ。思掛けねえにした處で、
ひやい、其の美しい女が腰掛けたばかりなら、鵜の野
郎と同士に、はい、首なしの死骸に吃驚仰天の夥間

だらうでね、それこそよ、眞個に、今度は、きちやうめんな人間の婦の、目をまはらかす處を飛付いて助けもしいべいだ、何うでがす、蹴出しに足首が、はい見えたと一所だ、其の足許に、一箇、（黒い提灯。）があつたのに氣が付いたではねえかね。

え
と云つた。
其の黒い提灯。」

此が話の本尊で、鵜の事も實は、（黒い提灯。）につけて、治平が間宮に物語つたのである。

海から上つたとも言ふ、沼から湧いたとも言ふ、土地はじまつてからもつひぞ無い

親仁が六十餘りに成るまで、此の濱で珍しかったは、一年海豚の大漁があつたのと、正覺坊の雌が、海からぬつと上つて来て、砂地を水掻で引掻いて、卵を産んだあとを、腹でべたん、と壓しながら、青異人館の唐黍白まで伸歩行いた事と、夜網の地曳に槍鳥賊を盗んだ男が、頭から胸まで墨を流して、曝しものゝ大笑と、そのくらゐなもので、海の幸は、ひしこ鰯、鯖、小鮓、畠のものは茄子胡瓜。山には

松風、朝霞、出汐、引汐、夜と晝。蛭ヶ家、茅屋の
夕煙、垣の露草、蓼の花。

變つた事は何にも無いのに、今年も 然

も此の夏に成つてゝある。 其海からか、

沼からから山か、峰か、谷か、それとも穴から出る
のか。村、里、田の畦、小橋の上、崖下、岨路、蘆
の中、地藏の前、社の縁、ともすると鬼火の如く、
(黒い提灯。) が點れて通る。
として往來する。 朦朧

見たものは大切で、決して其のまゝ無事では濟ま
ない。目を疾む、熱を煩つた、烈しいのは唾に成つ
た。が、遠くは然したる害がない、近づいたものほ
ど祟りが酷しい、中にも怪火とゝもに裳の影、足の
所を見たものは、今までのうちに最も激しい、殆ど
半死半生だと云ふ。

「それを、お前様、顔まで見たゞ鶴の野郎 ー
氣が違ひましたゞ。 弱つた事には、

乗つたのが濟みましねえ、跨いだのは謝罪

りました、 とツて、 聞いて居
られねえだ。さうしちや、あたり八方、手を支いて、
きよろ／＼限まなこで、ひた／＼と叩頭おじぎばかりするだあ
ね。
「

「尤も、はい、野郎は其の場で氣絶した。地引き船の見廻りが、夜中にかんてらを點けて磯を歩行いで、其が、はい、相撲に投付けられた體に平伏つた。鵜三郎を見付けたでね、家へ擔込んだものでがすよ。

一度、正氣づいた、其の夜さり、巔末を喋舌つたつけえ、あけ方、雀の聲もろともに、右の濟みましねえ叩頭をはじめた。三日にも成るが、今もつてだあ、お前様。」

間宮は半ば信じなかつた。が、こゝに黒い海の、毒龍の如きを視めて、蹠から、そいで引かれさうな砂濱にイんで、イむ處が、何うやら更衣場を斜違に近い、其の鵜と云ふのが、怪いものとも知らないで、首のない白裸の妖艶なる軀に、人工呼吸を施した、と餘り隔らない、同じくらゐな場所だと思ふと、信じない話の癖に、何うやら我知らず引着けられた氣がし出す。

唯、人氣勢も何にもない、件の葭簀張の其も破御
簾、昔傳へた荒海の障子の透間から、漆の如き黒髪
を颯と捌いて、白い顔が差覗いて居さうで成らぬ。

間宮は又、畝を打つて、渚に碎ける眞黒な浪の裾
の、怪しく凄く、稻妻を倒して光るのが、何故か一
箇の偉なる（黒い提灯。）で、嘘にも
せよ、治平の話に、冥々の裏に一種の暗示を與へた
やうにフト考へへた。

實際、底知れぬ水の怪異に恐れた彼は、やがて少
くとも活きた海の一枚を、眞白き片手に提げて、夜
咲く花の幻の、美しい裳を照らす、不可思議なる婦
人の威力に逢着すべき運命を持つて居たのである。
後で言はう。

第一、爛れた星、腥い風の、人の喘ぐ溜息に従つ
て、影を顯すのを見るにつけても、久しく同じ處に
居るに堪へない。

「敵か、味方か、たよりない稻妻の射ない前に。」

鹽しほに濡ぬれつゝ硫黄ゆわうのやうな、むつとする砂すなを踏ふんで、よろ／＼引返ひつかへす、と其その脚あしが、おのづから絲いとで操あやつらるゝ如ごとく葭簀圍よしすがこひに引寄ひきよせられる。

いや、嘘うそではない。

蟹かにが居あて番ばんをしさうな、明放あけつばなした五燭電燈しよくでんとう、潮煙しほけむりに茫ぼうと立たつ、秘密ひみつな見世物みせもの小屋こやを、密そつと覗のぞかうとして身みを躲かはして、すた／＼と遁にげた。何なんにもないのに。

其處そこが直すぐに海岸かいがんどほ通りの入口いりぐちを、小走こばしりに衝つと出でる、と兩方りやうほうが西洋館せいやうかんの、挟はさんで高い石垣いしがきへ、砂すなを捲まいて、海月くらげが追掛おひかけたらしい青白あをしろい燃立もえたつ波なみが一あふり。馬うまの前脚まへあし搔かきこむ如ごとく、どんと畝うねつて、さつと打うつ、と彼かれがはつと思おもふ時とき、「ほゝゝほゝ。」と、女をんならしい、媚なまめかしい、が、凄すこい聲こゑが、暗夜あんやの濱はまに響ひびいたと思おもふなり浪なみの音おとも聞きこえなかつた。それ

間宮まみやは阿彌陀あみだに背負せおつた麥藁むぎわらの海水帽かいすあぼうを、黒くろい腕うで

が背後の海からもいで離すばかり、据首に急いで、
海岸の橋へ歸る、と最う兩側に人家がある。四角な
別荘の灯も映った。

が、列卒が最う取巻くらしい、墨を流した汐入の
小川は、蘆の葉も光る、樹の根も光る、岸を洗ふ石
垣、も、中を流るゝ泡も光る。

星は一つもない。

間宮は掌で眉を分けて目を擦った。海の潮を、何
時の間にか面に沿びて、その影が散るのであらうと
思つたから。

唯、橋杭をむら／＼と潜つて、黒く濁つた水に、
光を刻んで、はしりがきに壽の字を流す、と一掬、
水にひらりと亂れて、串の字を崩しながら、川柳の
根を、颯と洗ふと、上汐に乗つて、逆に返す一つ一
つが、泳いで嘸まんづ毒蛇の牙、鱗の如く沈んで輝
く。

「小魚の癖にして、まるでうらう。」
間宮は苦笑した。

「其の通り。」
と、つうと離れた處で、一尾、翻然と匆ね上つて、水を離れて光つたと思ふと、ばちやんと消えた。
續いて、ぬら／＼と水を敵らす。

「鰻も居やがる。」

此の流と、同一水筋ではあるけれども、間に道路を隔て、洲を隔て、青田、昌、家、雑と一村隔てた池田に、風早橋と云ふ小橋が一つ。鎌倉通ひの道筋で、鐵道の踏切を越した處、左に久木久能谷を控へ、右に、新宿の濱、小坪の岬を展く。今の海岸の橋とは、叔母と姪ぐらゐな縁續きがある。

暫時すると、間宮は、名をなつかしんで、此の橋の處へ来て居た。

時に、談者のために御注意を願つて置くのは、池田の此の風早橋の――土地には珍しく爰に螢が多いので螢橋とも名づける――此あたりが、特に黒い提灯の逍遙する、魔の通ふ欄干つきの殿だと風説する事である。

彼は然し、はじめて來たのではない、豫て此の邊の地理を知つて居た一。

處で、今しがた可恐しい海の模様に一怯して引返した、あの海岸橋のうへから覗いた 黒い
水に、波を乗つて追つて来て、我を嘲り翳つたやうな、小魚の燃ゆる青い火が、壽の字は知らず、一度、串と云ふ字をはしり書して、ざつと崩れて光りつゝ消えた事を云つた 其の時にも、何故か、
此の橋に来て見たくてならなかつた。眞は避け憚るべきであつたかも知れぬ。

不斷から、橋の邊一ヶ所、も一つ山の根を入つて、柏原へ行く途中に 一ヶ處、水たまりの用水が四角な池に成つて、それを小川の貫いて流るゝ形が、ふと串の字形によく似た、と思つて居たから
御祓の繪とも一言言はゞ言はれる。

橋に近い松蔭の池は小さいが、次のは蘆、薄をめぐらす、村の小兒は連立つて泳ぐくらゐ、奥にはもつと大なるを、四五ヶ所湛へると聞くが、其は知らない。
潮は此處までは最うさゝぬ。ために螢が、稲葉に露を置添ふる、田の畔にも豆の莖にも、松葉にも。

涼しさ、涼しさよりは寧ろ冷たさ、冷たさも餘所に較べて、風早橋が一番であつた。

然りながら、當夜の蒸暑さは、なか／＼以て場所によつて凌げるやうな、生優しいものではなかつた。剩へ、昨夜の事――藤澤通ひの駄賃馬が、鎌倉の方から夜更けに戻つて、馬士が螢橋を渡切る、と馬は一脚板に付けた、其時、ぼつと目前に點れたのは黒い提灯。と見たが疾いか、馬はヒイーンと嘶いて、棹立になるや否や、低い欄干を一狂ひして、橋下の淀みに嵌つて死んだ、と來かけに氷店で、また新しく聞いたのである。

話は一寸戻る。先刻橋を渡つて、松原を引返した時、床屋は既う店を鎖したが、裏を開けて涼んで居よう、暑さに呻くやうに尺八を吹くのが聞えて、路傍に釣つたまゝの、土瓶の火は消えたけれども、まだ白い煙を噴く。下に百日紅の花が散つたやうに、油煙の餘燼か、羽蟲の羽の焦げたのか、陰氣に點と赤く散つた。

然るにても、海には久しく居たと思ふ。

角に一軒、氷屋があつて、まだ店を開けて居たが、軒に點した水提灯の波も、思ひなしか、凄くも黒い。

店頭に、恰も土で捏ちたのが、腰から下は海鼠の如く溶けかゝつた、暑さの餘りの土偶三個、氷もとける湯氣の中に、渾沌として素裸の男が二人、女中を相手に。――

「可厭な釣臺が通るだ。」

「また、黒い提灯だんべい。」

蒼い脚がひよろ／＼と、提灯で砂を黄色にして、さし荷ひのやうに、それは田越の道を行く。

「今のは女でねえかね。」

「何、女だとして容赦しべい。」 「お前らも迎に

来るだ。」

「きやつ！」

「間宮が、其處へ、

「姉さん、一寸御免よ。」

前途が餘りたよりにない、池田は暗夜の厚衾木の葉の蚊帳を透く風もない。線路の枕木も汗を絞る、踏切から最う歸らうとした。

心持もよくなかった。一つ盛上つて目の前に横はる其の踏切の、恰も難波船の底に浮いたやう、夜陰に忌はしく見えるのも、何うやら人界と、他境の區域であるらしい。

間宮は、番小屋の窓を睨んで、ガチンと仕切をされたやうに、浴衣で、帽を背負つて一人人立つた。

其處へ、草の土手に松明の数を揃へて、振り閃めかす事火花の如く、紋着羽織、袴、足袋、職工服も中に交つて、

「六根清淨。」
「——高らかに、勢の足を軽く刻んで、すた／＼と來た一行は、少なからず彼の勇氣を鼓舞した。

「戸隠様の神酒が戻つた。」

「それ、雨乞のお水が来た。」

閉めた雨戸から女房が顯れ、垣根から娘が出、小兒も巢から轉げて走る、路傍なる農家の面々。

「めでたうござんす。」

「御苦勞にござんす。」

聲を合せて、

「寓歳。」と火を振ふ。

「六根清淨。」

早使の雨乞人は、眞中に唯一人、満面に朱を灌いだ、据眼に成つて居る。白木綿の後顧卷、頂く御幣を箆高にしゃんと負ひ、白衣の胸に、御水の壺を兩手に捧げて、汽車はあるが越の戸隠、上下を一眠りもしないで、歸つて、寸時も疾くて、停車場の近道を、出迎の人数に守護せられて、此の土手を突切つて来たのである。

「六根清淨。」

一行は新宿さして――

あはれ、奇特には、天に銀河が感應したか、と踏

切の道が薄明るい。

間宮はづくと突切った。いまので、太く陽氣に代

つた事は

「はゝあ藤澤通ひだな、人間だと頬被りで、矢藏

と云ふのだ。」

螢が一ツすつと来て、田から路を切つて山の腰へ、
すい／＼と青い糸を引いて行くのを見つゝ、仰向い
て獨りで笑つたのである。

あとで考へると些と怪しい。

池田の青田は螢の影、水もちら／＼碧い露。

「それ、美しい遊女たちが、可愛い行燈を・稲の
葉に灯して待つ 白露に鐵漿つけて、紅さ

して

成程、土手から通ふわけだ。

あれ又スーツと畦から来た。すらりと草から飛ぶ
のがある。それ水淺黄の媚めいた襦はら／＼と

女は美しい襦を捌く、野郎は龜覗きの手拭だ

な。

待て、しかし、宿場ぢやあるまい。山の崖の松の葉越に、寂しい、細い星が留つた。二つ三つ、それも螢だ。松の位の太夫職と云ふのであらう。

稲葉、浅香、阿古屋、岩越、久木、久能谷

新宿、小坪は 不可いな。吉野、初瀬、

薄雲、高尾、恚うした處は仙臺様だ。「と、有らう事か、橋の欄干に反つて、彼は海水帽で胸を煽いだ。

忘れては成らぬ、黒い提灯に呪はれて、馬の落ちたのは昨夜である。

彼は其を聞いた、と同時に、いつか、村

のものが橋の下で、尤も日中ではあつたが――
破れ障子の骨を洗つて居た事も見たのであつた。

鎌倉街道を提灯が二つ三つ。

爺・婆、女房七八人、ぞろ／＼と橋に來懸つたの

は、近まはりの念佛講中、教化に呼ばれた戻らしい。

此の又陰氣さ。孰の衆生も、夜氣に當つて、じめ

／＼となり、釣臺に着いたのを思出す、青い脚やら、

鼠の脚布。――よた／＼亡者の辿る

が如し。

「お難有や、難有や。」

「難有や。」

「五穀成就、暑うござる。」

「一雨ほしいなう。」

「甘露法雨ぢや。」

と、ぶつ／＼獨言のやうに各自が饒舌つて來て、

一人、によつと留り、

「おゝ、風早橋。」

「無常迅速とお説きなされた。」

「お互に彌陀如來の御催促を忘れては成りませ

ぬ。

「一風吹けばお迎へぞえ。」と、竹の杖を肩越

についで、皺手をぐい、と屈腰に握つた、だぶ／＼と黄色に膨れて額のぬけ上つた婆が、通りすがりに胸を伸して、のそりと反りつゝ、間宮の顔を、黒い額で、じろりと仰向けに睨んで行く。

雨乞とは打つて變つて、言ふばかりない其の不氣味さは、年寄の後生氣から、危い橋に立つものに、心附けをしたと思はれぬこともないが、こんな婆に救はれるくらゐなら、何かは知らず、其の黒い提灯に取殺される方が増だ、と思ふ。間宮は引入られさうに可厭な氣がして沈んでとして目が暗く成る。

漆のやうな水田をかけて、橋下の流の緑に、濡増る螢の影は、薄が茂つて小川に捌く、黒髪に、翡翠玉を鑲めた風情である。

唯見る間に、揃つて、殆ど一齊に脈を留めて光を消す。

「ぎや、ぎや、ぎやッ、ぎや、ぎや、ぎやッ、ぎ

やぎやぎやツ。」

耳許に蛙の聲、

あゝ、酒肥りのした疣大盡に狙はれて、淺黄の蹴出しの遊女たち、草の店に顰んだな、と思ふうち、浮世を果敢なさうに、あはれに點るゝ。

「ぎやツ、ぎやツ、ぎやツ。」

ほうと又消えた。

橋の上に蛙が鳴く、足許が、と見れば目の前で、
――まさか、此の口で鳴いたのではなからう
――小相撲の如く横肥りに肥つた、脊のづんぐ
づとした漢が、大肌脱の頸へ手拭を捲いて、暗にの
そりと突立つなり。

濁聲のドスを入れて、

「何をしとるだあえ。」

間宮は返事せず、素知らぬ振した。

が、爪盗人を捕へむとて、長者の下男が力んだ體
で、

「あゝん、何しとるちばあ、これ。」

「私か。」

「おゝ、お前等よ。」

「涼んで居ては悪いのか。」

「可厭な奴だ、とむしゃくしゃで云放つ。」

「何が、納涼だんいべい、お前等。海水浴の智慧者面して、黒い提灯を見届けに来たんべい。」

「扱は、魔性の槍持が、露拂ひに人を追ふ、と一寸氣にした。が然うでない。」

「へゝん、村方の人のねえやうに出洒張つて、へい、止してくらつせえ。正體は俺が見届けたで、俺が手柄に生捕るだ。多勢に難儀をさせた、蛇體めよ。」

「何、蛇か。」

と、釣込まれて、うつかり訊いた。

「蛇體

「と云ふ。」

奴は嘲笑つた呼吸を投げて、

「何を空惚けるだえ、藝もねえ。池田にも久能谷にも提灯を点けて歩行く蛇と云ふが、日本中何處にあるだよ。村方のものだ思つて馬鹿にするなえ、柏原の權次郎だぞ。」

と、尻を捲つて、凡そ一泡もあらう股を、もり／＼と引掻きながら、

「黒提灯の正體な、若い別嬪だと云ふこと嗅着けて、お前等、汝が手に生捉るべい思つて來たゞ事は風體で睨んだぞ。好色野郎、然うは行かねえ、俺が三日五日附廻いて、生命懸けて見届けた蛇體だ、世間の人助け、村のものの復仇にも、引裂かうと、のたくらさうと俺が勝手だ、指のさし人もねえ。今夜此からぷつ占める、で、お前等、へい、對手の形が別嬪だ云ふ處で邪魔をしてはなんねえぞ。可えか、あん、分つたか。」

と聲も腹も圖太く極着けるのに、憤然として、

「何だ、お前は。」遣返した。

が、ぎよつとしたも道理こそ。

「くわツ、くわら、くわら、くわら／＼／＼。」

唐突に蛙の高鳴、腹を突出し、咽喉佛を仰向状に

揺つて、高聲を絞ると、胸をドンと打つて、

「こんなもんだ。此の餌で蛇體を釣るだ。お前等
が目の届かねえ谷戸中へ引込んで料理るべい。何ん

なもんだか、ばあ、と吐け。とぼん、として居ろ、

へん。」

と笑つて、膏の蒸れた汗の臭氣を芬とさして、腕
を突出し、据腰に成つて、間宮の前をぬうと抜ける、
と小橋を踏切の方へ渡越す。

其處で跽音が止んだ、と思ふと

「や、出たな。」と勢つて、ばさ／＼と草を踏

む音。やがて山の根の樹立に隠れた。

――田の畦らしい、松原一ツ遙かに離れて、流

の上とも見えるあたりに、沖の小船を彩つたやうな、

底の長みを持つ薄暗い灯が一つ――螢の光だと

思つた。

が、蛇體だと云ふ、別嬪だと云ふ、引剥ぐ、と

云ふ、のたくらすと云ふ。今の奴の言種と、駈出し

たらしい勢に引かれて、間宮もつか／＼と小走りに成つた。方向は變へた。此方は橋向うから街道を横に、稍幅のある畔道を切つて入る。丁ど畠を中に隔て、谷戸口を行つた其の權次と云ふのと、眞中に挟んで、灯を目當にした事に成る。

所謂、（黒い提灯。）ではよもあるまい、夜氣に沈み、靄に浮いて、人丈の顔の邊が、と見れば足より低い。來るかと思ればあとへ引き、行くかと思すれば前に進む、一所に留るやうでもありいふは／＼と揺れても見える。

それが、小橋からの間隔を、やがて半ば彼が進んで、灯も稍大ぶりに成りさうに思はれる處に成ると、高いも、低いも、縦にも、横にも、跡方もなくふつと消えた。

時に、山は大きく、田は廣く、眇としてたよりなく成つて、今まで灯れつ、と見るあたりに、唯、聞ゆるのは蛙の聲。あの、眞似をする男も交るか、時節を過ぎたに遙に集く。

這奴の血相、懸念に堪へぬが、此の寂寞たる中に、
他に蟲の聲さへ聞えぬのは、手籠になぞされたので
はあるまい、怪しき姿は消えたのであらう。

螢が来る、螢が来る。續いて二つ、すら／＼と空
を飛んで、我を歸れ、と導いて、幽な絲を投げて行
く。

間宮は橋の方へ引返した。

と《青田一枚、山の根の方へ隔てゝ、あの、池のあるあたり、間宮が畦道を歸りつゝ見た、ものゝ、其の時の姿ばかり、凄くも艶に、綺麗な色を嘗て知らぬ。

雖然、目の留つたのは裾のみである。其の裾は、はら／＼と濡色の草の翠に、淡く淺黄を重ね映して、薄い灯に、雪にも紛ふ襖先を捌いて行く。

あゝ、間宮は遂に視た。

(黒い提灯。) ではない。願くは濃い紫の燈籠と言はう。菱形に膨りと組んで、一面に紺土砂なんどで包んだやうに、上が暗く、底のやゝ明いのは、大なる桔梗の荅にもまがふ、遙に舷の形に見えたのは此である。

この燈籠の影は、淺く暗いために、螢の青い光を消さぬ。羅なるべし、袖摺れに、靡く蘆の葉、薄の葉に、靡く襖は、草を宿し、露を散らし、また、螢

の青い影を映す。

其の棲の、葉と葉としつとり、白脛に搦んで、細く徑を移る毎に、指の數ほど、螢が薄へ、螢が蘆へ、すら／＼と灯れて散る。散るが、深くもこぼれず、高くも飛ばず、白露の轉ぶが如く、水際に戯るゝ。

其處に、上搔を開く棲、下搔を捌く裳は、蘆間に寄する渚の浪。

地摺れに灯した燈籠は、影も、光も、蒼海原を手鞠の如く取つて提げしに似たらずや。

唯思ふと、一種の靈威に、彼は、被つて居た海水帽を脇に挟んで、敬意を表せずには居られなかつた。

其の燈籠は浪に點れて、蘆を打ちつゝ、而して草の小徑を行く。一度、最も近づいた時、池の面が颯と映つて、水の輪を捲く杭も見えた。と、松の樹の茂つた中に、裳もろとも灯が弗と消える。

遠方に蛙の聲々。

燈籠持てる人の、其餘波とも見えたのは、山の

根を、一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、不思議にも、一尺ばかり同じ間を隔て、ふら／＼と街道の方へ行く螢で、行列なして、青く點してふはり／＼と辿り行く。

彼は吹きもしない風に、ふら／＼と案山子のやうに成つて、袈婆の遊里を視る螢橋の上へ急いで戻つた。

其處で視めても、四ツ續いた山の根の螢は、まだ其の列を崩さないで、却つて、近く大きく映る。

「姫様、お駕籠か。――いや、土手通ひの提灯だ。――人形の燐火。――」
と思ふ途端に、其の眞先の一箇か、中空に弧を描いて、山を切つて、すつと飛びつゝ、ふはりと間宮の頭の上へ。

眉に星を塗られた氣がして、顔を振つて、足を釣られて仰向くうちに、其の螢は、編目に濡箔を置いて、帽子の裏へ、ひらりと留る。

彼は持直して、熟と視た。

草の家の遊女たちは、青い蹴出しを・ひら／＼と、
其處此處に姿を見せたが、其の中から別に一つ――
すい／＼と優しく来て、すつと又麥藁の縁に留つ
て、四五寸、するりと這ふうちに、前の螢と一所に
成つて、もつれて一つに成つて、眞直に衝と立つ、
と一呼吸、どの螢もはつと消えて、四邊は一面に水
の匂ひ。潮風がぶく／＼と淀むやうに吹いて来て、
幽に颯と鳴るのは彼方の松風、池のあたりの梢が一
揺れ、揺れたと見るのが、蓬に黒髪を捌いたやうな、
其の枝透いて高い處に、恰も葉がくれの明星の如き
大なる光を架けたは、影一つ、螢である。

「彼處へ行つたか、誘合つて、」
うつかり落して、足許に轉がつた麥藁帽子に心付
いて、俯向いて瞳を返す。――

「誘ひに来たんですわね。」
背筋を氷の撫でるが如き、沈んだが涼い聲。
間宮は汗も魂も一齊に引込んだ。
其處に、床几には丁度持つて來いの、低い欄干に
棲を深く、細り掛けた帯腰の柳を透かして、直に橋

板いたに黒くろい提灯ちやうちん。

膚も透くやう、羅の紺地を着た、洗髪の櫛巻で、すつきり鼻筋の通つたのが、切れた眦を伏目に、優しい若い眉して、俯向いて、同じ其麥藁を熟と視めて居たではないか。

間宮は頭から窘んだが、

「貴女は？」

「此のあたりのものですわ。」

まあ、失

禮な、お狂言の言葉のやうでござんすね。」

「むゝゝ。」

とばかり、呆れて顔を瞻ると、目の痛いほど艶である。

「誰方です。」

「遊女です、女郎です、辻君とやらなんです、そして螢の化ものです。」

呀！ 狐は人の心を読む。

「宿場の、――草の戸で男を引きます。それでも買手がござんせんから、灯を點して、矢張り今

の一つの螢のやうに男を誘ひに来るんです。身を焦すツて言ひますから、あやかつて眞似をして、裯の色まで、燈籠まで。ですが、誰も相手に成つてはくれません。」

「貴女。」

と、屹と向直つた、彼は蛙鳴の權次を思つた。

「相手に成つたら何うします。」

「えゝ、すぐに抱かれて寝ますわ。そのために、こんな奇異い服装をして
暗夜を焦れて出るんですもの。」

間宮は此まで聞いて胸が据つた。巻煙草を抜いて、

「火を一つ貸して下さい。」と、黒い提灯に指

を差した。爪もしびれず、脈も留らぬ。

「あれ、一寸。」

袖で娘らしく庇つて遮る。彼は、更めて吃驚した。

「不可ませんか。」——毒か知らん、それと

も

「否、お易い事ですけれど、お煙草をめし上る御役には立ちますまい。」

「何故です、貴女。」

「焦れて燃えて居りますものを、煙になすつちや酷い事、可哀相ぢやありませんか。眞個に螢の化けたのです。お煙草には點きますまいと思ひます。」

「失禮しました。」

「まあ、待つて頂戴、貴方。折角ですから、火の點きますやうに私がお禁厭をして差上げませう。」

ほゝ芝居の魔術がゝりで。」

と向直ると、袖を投げたが兩手を懐、げつそりした婀娜な姿、と見ると、薄りと衣紋が開けて、すと、立てた細い指。白い小蛇の鎌首が覗いたやうで、思ひも掛けず悚然した。

が、透いた膚の美しさ、乳を流したやうである。

蝋燭はしかし、鱗の臭氣もしなかつた。吸つた煙草は敢て澁くも苦くもなく、何時喫むよりも甘かつた。

「點いたでせう、ちゝんぶい／＼、おほゝゝゝ。」

螢の印を解いた手で、そのまゝ、笑ひながら、黒髪かみのほつれを解くと、と小指こゆびを反そらして、一寸簪ちよつかんざしを突つ込んだ。

間宮まみやは、づゝと身を引ひいて、ものをも言いはず、たて續つけて吹ふかして居ゐる。

「貴方あなた、私わたしにも飲のまして下ください。」

「煙草たばこを。」

「えゝ。」

「いや、それこそお易やすい御用ごようです。」 「否いゝえ、

と、投なげるやうに肩かたを振ふつた、が得えも言いはれない嬌態しななに成なり、

「其そのあがつて在いらつしやるのを。」

「や、飲のみさしを、」

「頂いたきたいのよ。」

「しかし、しかし此これは」

「不可いけいんですか、ぢや返かへして下ください。火ひは私わたしがお貸かし申まをしたんですから、其それを返かへして頂いたきますわ。」

「おあがんなさい。何なんとも、是非ぜひに及およびません」

「

婦人は軽く指に挟んで、

「エチプトですね。」

「到来ものです。」と、我ながら苦笑する。

「あゝ、おいしい。御無理を願つて——貴方

はお嫌ひなさるけれど、あの逆縁とやらですが、吸

つけ煙草は、遊君のお儀式だつて云ふぢやありませんか。

んか。」

「ですが、こんな結構なお煙草だと、お相手は薄雲、高尾、吉野、初瀬でなくては不可ませんねえ。」

間宮は再び怯かされた。

「済みません 私なぞは、葛の葉、更科、姥捨ですわ。」

と自由事を言ひながら、欄干に水際立つて、するりと抜けさうな、淺黄鹿子の扱帯。帯は寛いが、衣紋正しく、燈籠の灯に柳のやうな櫛卷の幻を映して、長閑さうに田の面を見渡し、

「お友達は一寸皆さん、おしげに成つた羨しい事、あの、貴方もおやすみなさいませんか。」

間宮は身繕ひを、きりゝとして、襟を端正と合せながら、

「私は無事なうちに失禮します。 貴方

もお氣をなすつていらつしやい。」

何故か、しんみりと成つて云へば、しんみりと頷いて、

「は い。」

「こんな晩は、お身體によくありません。」

「御深切に 氣を付けました處で、身體

に悪うござんすたつて、婦が、たかゞ、宿場女郎ぢ

やありませんか。身體は疾に悪いんです。途中で悪

戯をされましたつて、畢竟それはお客ですもの。私

は其を捜して歩行いて居ますんです。 恚

う云ひますのを、すねるの、曲るのと思はないで下

さいまし、串戯にも、誰も介意つてくれるものは無

いんですから。 あれを御覽なさいまし

な。」

と、空を教へるやうに云つた。撓つて細い人指ゆ

びを、欄干越に、紫の緑の絲を引いて指されたのは、

彼方の松の葉の中に、同じ所に、今も輝く

星かと思ふ大なる螢の光である。

恚う相對してゐんだ、はじめから、此の婦人と、

其光は、何か結ばつたものが有るやうに思はれた。

「ね、彼處にもお仲間が一つ居ます。三階の部屋

に賣残つて、思惱んで居る可哀相なものです。あの

光ひかりの、他ほかより一倍強ばいじょういのは、焦こがるゝ思おもひが切せつなさゆゑで、身みの果報くわほうではありません。

私わたしは毎晩見まいばんみます、そして、可哀相かはいさうでなりません、
一つ離はなれて、骨ほねの折をれた松まつの梢すずめで、一生懸命しやうけんめいに青あをい
灯ひを點ともして、どんなに男戀をとここひしいか、妻可懷つまなつかしいか知しれ
ません。ひれふる山やまも思おもはれます、佐用さよひ
姫めのやうな螢ほたるですね。」

しめやかに云いつて、俯向うつむいたが、膚はだも筋すぢも萎々なよくと
成なつて、衣きぬに堪たへない風情ふぜいであつた。

「一吹ふき吹ふけばお迎むかひぞえ 一
むゝ、あの婆々ばゝに救すくはれようより、可よし、美女たをやめに
殺ころされよう。」

「貴女あなた、お別れわかれに其その煙草たばこを下ください。」

「えゝ。」

「今度は私わたしが、御返濟ごへんさいを強求ねだるんです。」

「否いゝえ、お別れわかれぢや私わたしは可厭いやです。」

「ですが、」

「それは、私わたしはお貸かし申まをした火ひをお返かへし下くださいッ

て御無理を申しました。煙草は貴方にお返しいたさなければ成りません。けれど、螢に手向けたと思つて下さい、露より果敢なく消えるんですもの。」

「では、私は別れますまい。」

「そして。」

「歸れと仰有るまで傍に居ませう。」

「それぢやあ、貴方にお願ひがござんすのです。何うぞ、あの前方の松ケ枝の螢の許まで、御一所に入らして下さいませんか。」

覺倍はしたが、果せる哉。

「實は、あの螢に誓ひました、――五日も、十日も、毎晩、同じ光が同じ所に灯れて居ます。身に引比べて、餘り果敢なく可哀なのを、思遣つた處から。」

「――私の魂は、屹とお前と一所に居る――ですから、魂は彼處にあります。彼が私の魂なんです。――空蝉に灯したやうな、お氣味の悪い燈ですが、さ、道しるべをいたしませう。」

草を分けつゝ、足許の辿々しさは、燈籠の影に、青く且つ白く、凄く艶なる浪に巻かれて、黒い海を踏んで唯二人、沖を渡る夢心地がした。が、肩を摺れ／＼に、なよ／＼と、しどけない姿を投掛けられて通るのは、離れの間に導かれて、月さす桔梗、女郎花、築山を繞る胸のときめきであつた。

螢が灯す松影の窓。

天秤くらふな、此の化されものめが！

「褌をお取んなさい、濡れますから。」

「貴女こそ。」

「私は鐵の如き脛です。」

と云ふ下から、棒のやうに立窘む。

「何うなすつたの。」

「此の際申しては、龍宮で月末の勘定をするやう

ですが、草深で、蛇、蛇が、實は

言ふ。

「あれ、蛇がお嫌ひ

大丈夫、私が居ま

すから。」

間宮は猛然と思起した。――蛇體の事。――

右手を遙かに、屏風を繞らす山の陰から、立樹を越して、蛙の聲、閨を守宮が覗くやうに、
「くわつ、くわつ／＼くわつ／＼くわつ／＼。」と高らかに冴えて響く。

「あゝ、成りたけ燈籠の灯をお包みなさい。此を目標にして、貴女に附纏ふものが居ります。」

「は、亭主ですか。」

「え。」

「肥つた疣蛙の事でせう。」

と澄まして云ふ。白い顔が燈籠に、唇の紅が凄い。

「貴女。」

と、一言を切つて、

「如何に、何が何でも、私に此際、御主人の事を云ふのは酷い。」

「まあ、貴方は、私と忤うして、主人に成る、御

亭主いしゅにおんななさるつもりなの。それはお止よしなさいまし。世間せけんの亭主ていしゅと云いふものは、自分じぶんの方ほうから強しひて望のぞんだ戀女房こひにようぼうでも、其その女房おかみが一旦たんぷかう不幸ふこうで、人ひと交じりの出来できない病氣びやうきになると、片田舎かたあなの別荘べつさうへ、お慈悲じひの牢屋らうやで押鶉おしこめて、それも、たてすごしに一生じせうを過すこさせでもする事ことですか！

空間あきまを貸かさせて、男をとこを近づちかづけ、人間にんげんの生身なまみの情なさけない、浅あさましい身體からだの慾よくの弱味よわみを餅もちに、道みちならぬ事ことをさせるやうな仕向しむけにして、不義ふぎ、不品行ふしだらな迷まよに落ちれば、それを言立いひたてに離縁りえんをしよう。野のにも、山やまにも、良人をととの家のほかには行く所ところのない果敢はかないものを、青竹あおだけの杖つゑに継すがらしても追出おひだす企圖たくみをするものなんです。そんなのが亭主ていしゅですとさ。

そんなものより、いろにおんななさいまし、ほゝほゝ。」「

と花はなやかに笑わらひながら、眦まなじりが逆立さかだつた。が、はつと草くさによるめいた、見みよ。紅鼻緒あかはなをのゆひつけ草履ざつり、足あしには踊子をどりこがするやうな、白しろい三つこせぜを深ふかく穿はく。

間宮は針に呪はれた、美しい毒蛇を憐んだ。

「危い、お手を。」

「否、いろと思ひ、情夫、と思へば、お庇ひ申さねば成りません。私は悪いことを澤山しました。罪を造りました。此は腐つた女郎です。呪はれた蛇です、爛れた鱗には毒があります、觸つては不可ません。

此が婦の眞實です。

あゝ、口づけした此の煙草を、のまうと云つて下さいました、私は嬉しうござんした。」

と涙ぐんで、ふと立ちしが、

「お煙草は、私が、貴方の吸口まで嘔きました。」と振向いて莞爾した。唇の蒼の、薄靄に開かむとする面影を見て、間宮は恍惚と我を忘れた。

我はこゝに、先刻に一面の青田を隔てゝ、魔界か、神仙の境かと見た、池に近く、同じ人とゝも同じ色に包まれて、同じ艶の裡に立つのである。

「來ましたーー けれども、お約束いたしましたお

煙草は、それですから、最うお返し申されません、故と差上げません。お歸りなさいますか——貴方何うなさいます、否、否、あれ、不可ません。」

「せめて胸を、胸と胸を！」

「否、否、」

と、身を翻して、唯氣を籠めて片襖あげた、が、

蔽はれかゝるやうに川に望んで、すつくと立つ

五尺ばかり一幅の狭い流が、用水を池から落す。此の向うに、松が一むら、就中高い

樹の、梢にあり／＼と其の螢の影。

「毎晩、毎晩、あの螢と一所に、私は夜を明かして此處に居ます。魂の許へ歸る、夢路を辿るやうな藻脱の此の身は、宙を行くもをんなじで、小さな此の流などは、あるとも知らずに歩行きました。けれども病氣を御存じの上にも、遁走りもなさらないので、胸を抱かうと云つて下さいます、貴方の前では、こんな姿も、形の亂れるのが恥かんくつて、襖を廣くは跨げもしません。」

不便と思つて下さいまし、
女

は然うしたものですのに！
「

と、番へた矢をば外したやうに、ふつと消ゆるか
と胸が低く、姿は地に裳して、草に支へた手は白し、
涙は散つて螢の數、蝋燭の灯は蒼ざめた。

間宮は拳をしめ足摺した、氣休め、なんと、受入
るべき婦人でない。

「夜が明けまして、御縁があつたら、またお目に
かゝりませう
私は洲の松へ参ります、魂
に歸ります。優しい方が在らつしやると、此の小川
が飛べませんから。」

いざ、とて道を照すやうに、やゝ持翳した燈籠は、
人と我とを境する、黒い波に似て幽に輝く。

不思議や、我が退くに從うて、此の灯次第に高く
成りつゝ、
松を傳うて、螢が近く、朦朧
として上るを見て、彼は一種の龍燈を感じた。

夜をまんじりともしないで、明星の消ゆるとも
に、洲の松を、再び訪うた時を聞け！

婦は高い松へ、幹を膝に乗るやうに、姿をなぞへ
に、羅の褌の下前も亂さず、蹴出しの淺黄縮緬も、
秋の水の如く静まり返つて、葉の數よりも千筋の黒
髪、そよ／＼と風のまゝ、小枝の股に爪先を反らし、
大枝に頬杖して、世を呪ふ目を眠つた。鬢の毛の亂
れは颯と、面は梢より高く兩の脛は葉よりも蒼い。
足くびを一巻して、其の幹の半ばから、ずる／＼地
に五六尺、鎌首を、つきんと擡げて、婦の爪尖をペ
る／＼と嘗めて居たのは、重き、大なる青い蛇。

唯見ると、濡色の洲の蘆を、楯に、二側、三側、
陣を備へて、一齊に紅の剪刀を揚げたは、夥多の蟹
で、朝靄に虹の染むが如く、さつと音を立て、犇々
と進むと、蛇は、足を舐める舌を逆に返して、鎌首
を宙に巻き、下ざまに碯と睨むと、蟹は、ずつと
引く。蟹が引くと、又舐める、一進、一退。夥多す。
且つ其處に行くまでの畦路を踏んだ時、大粒の雨の
注ぐが如く、幾百ともなき蛙の數の蝗より繁く飛ん
で、遁げつゝ騒ぐのに、間宮は既に一驚を吃して居
たのであつた。

松まつに近い水みづの中に、臀しりを埋うづんで、腸はらわたの如ごとく漬はなを長ながく垂たらしながら、腹はらを露むきたし出し、踞しゃがんだ大蝦蟆おほがまの形かたちで死しんで居あたのは、蛙鳴かはづなきの權次郎ごんじらうで。此これが諸肱もろひぢに抱か込んだのは、首くびのない、裸身らしんの女をんな。それは精巧せいかうの縫ぬひ、恰あたかも滑なめららかに鑄いたるが如ごとく、また美うつくしく刻きんだ白蛾はくごに紛まがふ護謨こむの身衣はたぎである、（　　）いつも婦人ふじんが身みを鎧よろつた　　）足あしには爪つまさき先さきへ拵こさへたが、癩らいび病やうにたゞれた婦をんなの足あしに措ゆびはなかつた。三鞋みつこはせの足袋たびも然さることよ、身衣はたぎの胸むねを合あはす處ところに、一てん點てん、縷かよりの絲いとの紅くれなゐがある。

村中むらぢう駈かけつけた時とき、渠等かゝれらが寄よらむとしつゝ、蛇くちなはに驚おどろいた形かたちは、いづれも蟹かにのやうであつた、灰色はひいろの。
　　で、誰たれも婦をんなが死しんだとは思おもはない、あれ／＼御新造ごしんざうが、松まつに寝ねて假睡うたぐねをして居あるのだ、と言いつた。

坂東二番ばんとうばん、三浦郡久能谷みうらぐほりくのや、岩殿寺觀世音いはとでらくわんげおん、四寓六しまん
千日ちぢの夜よ、聞書きゝがきの　　此この記き。

【完】